

琉球大学学術リポジトリ

特集 〈アジアにおける稲作文化の多元性〉 に寄せて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2011-07-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲村, 務, Inamura, Tsutomu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21228

特集 〈アジアにおける稲作文化の多元性〉に寄せて

稲 村 務

Feature Articles : Plurality of rice agricultural complexes in Asia through time and space

Tsutomu INAMURA

昨年度創刊した本紀要『地理歴史人類学論集』も第2号となり、特集を組んでみてはどうかということになった。経緯としては稲村の翻訳した黄紹文氏の著書の一章の翻訳原稿があり、それから得られるインスピレーションをもとにして、「稲作」をキータームとして特集を企画してみようということである。せつかく集まった異分野、異地域の研究者の中からどういった研究を生み出していけばよいかということは、これからも考えていくべき課題である。こうした経緯から、企画を言い出した稲村にも特集を組む意味を説明する義務があるだろうということで特集の趣旨を説明させていただきたい。

黄紹文氏の著書については訳文の末尾に説明したので省略するが、稲村が同書のこの章を選んだのには理由がある。著者自身の学問的立場は人類学でいうところの進化主義であり、19世紀の人類学者であるL.H.モルガンからマルクスやエンゲルスが影響を受けたものである。社会主義中国の学術の有り様も近年大きく変化しているものの、こうした進化主義は温存されていることが多い。しかしながら、この章の記述は文化と社会の一体化した機能主義的論文としても十分読むことができ、綿密な調査に裏付けられている。

学際的研究とは単に事例や理論を相互に参照することではなくて、学と学の間になら新たなパラダイムを創りあげることである。本特集では、歴史学、考古学、人類学、民俗学の間にならパラダイムを考えることであるが、そこにはすでに歴史民俗学・歴史人類学・エスノアーケオロジー、生態史、文化史といった枠組みが想定されている。また、地域も異なっており、比較民俗学、社会人類学もまたその方法を試されているのである。こうした隣接科学との学際的研究が意味を持つのは元の枠組みよりも現実をよりよく説明できるかどうかという点にかかっている。元の枠組みに他分野の資料を加えただけでは新たなパラダイムであるとは言えないのである。

本特集ではイネという植物と人間が作り出す稲作文化を複合的全体と捉え、その上でアジアにおけるその文化の複合、発生、伝播、変化を捉えようとするものである。ここでは伝播や発生の問題にもそれに関わっている人間の生活の問題がある。その上で、イネをめぐる最新の考古学的成果や稲作の社会史的な研究が展開されており、それぞれの分野の研究に新たな視点を生むことができよう。

民俗学や社会人類学の射程にしている時代深度は現在から遡ってせいぜい200年ぐらいであり、伝承によって復元できるといっても話者の祖父母ぐらいから伝わっていることが復元できればかなりよいほうである。また、考古学はモノから考えられることという制約があり、文献史学もまた歴史文書によって証明できる範囲という制約をもっている。こうした制約を打破するための枠組みはしばしば、文化要素の断片を比較するような進化主義、伝播主義的な研究に陥り易く、こ

うした協業はかつて盛んに行われたものの今日では廃れてしまった[cf.稲村2003]。中には注目すべき研究があることは確かで、従来の研究の読み直しが重要であるが、かつてのパラダイムの単純な復古であってはならない。

黄紹文氏の民族誌的記述は、機能主義的に読むと、棚田を中心とした生態系のなかで道具がいかに存在し、農法がいかに発達し、それに合わせて年中儀礼、祖先祭祀がいかに関係しあっているかということを示している。それはある遺物がどう伝播してきたかとか、どういった文化進化の段階にあるかということではなく、ある遺物がどういった生態系のなかに位置づけられ、農法の変化や近代化によっていかに変化するかといった文化の相互作用の問題として理解していただきたい。ハニ族の生活からいきなり古代を復元するのではなく、封建領主の支配の下にあった彼らの「中世」も考慮しながらそれぞれの文化の個性を考えることが「比較」なのである。

また、今日の問題である世界遺産申請といった問題も近年「文化資源」としてかまびすしくいわれていることであり、観光や文化保護といった事柄を考えるのにも参照例として役立つであろう。近年は資源人類学として、人類の生活の手段として「資源」を論じるという試みもなされている。

後藤論文は東南中国を中心に先史時代のアジアにおける稲作農耕の位置づけについて論じている。先史時代の稲作文化が実はアジアに単一的ではなく、地域的文化複合の林立した状況であったことが考古学的に示されている。

池田論文は国立歴史民俗博物館の研究グループが発表したAMS法という年代測定法の革新により弥生時代の開始が紀元前10世紀まで遡るとした説について紹介し、弥生時代を画する稲の栽培開始時期について、考察している。その上で、11世紀の琉球列島における農耕文化複合体の受容について論じている。

武井論文は近世の金沢の歴史研究であり、生態史、民衆史の立場から百姓の米に対する認識の問題を論じている。これは同じ水田という生態系の中に暮らす人々の米に対する認識、特に米の分類を論じており、認識人類学の民俗分類論とも呼応する比較例を示している。武井は近世百姓の米の細やかな分類からリスク分散という観点を引き出しており、近代の日本の農業がより白い米を求めてその多様性を失っていったことを考えると興味深い。

イネという植物は元来亜熱帯性の植物であって、日本人も含むアジアの民衆はそれを長い歴史と多大な努力をもって広大な地域へ波及させてきた。稲作民が持つこうした米への情熱をハニ族の民族誌的記述、中世金沢の百姓、考古学的成果から読み取り、アジアの文化生態史を考えるための新たなパラダイムを切り開く発端としては〈アジアにおける稲作文化の多元性〉という共通理解が生まれたことの意義は大きい。それが成功したかどうかは読者の判断に任せるにせよ、地理歴史人類学専攻が単に個別の専門分野の集まりではなく、それぞれの専門分野の特性と制約を理解しながら、相互に刺激しあい、こうした特集がまた新たな学際的研究を生み出す礎になることを願っている。

また、TPP問題など農業のグローバリゼーションが議論される昨今、アジアの稲作文化の多様性とイネそのものの品種の多様性は国際的な「資源」として重要な問題になっている。〈アジアにおける稲作文化の多元性〉という視点は、学問を越えてこれからの世界の稲作を考える上で極めて緊要な問題を提起しているのである。

稲村務 2003「日本古代史研究におけるハニ族資料の取り扱いについて：比較民俗学の進路」『琉大アジア研究』4号 琉球大学法文学部附属アジア研究施設 pp.63-80。